引きつけた紹介となってしまった。最後に、本書は近世社会経済史研究の上で一つの画期となったものであり、近世史研究者のみならず近代史研究者にも是非目を通して欲しい一冊であることを述べておく。

畑中佳子（大学院文学部文化学科文化史専攻）

表紙の言葉

致遠館

大学正面を入るとまず目に飛び込んでくる建物がこの致遠館である。

しかし、印象は薄い。煉瓦の暖かさを感じるものの、外観上、特徴があまり見つからぬためだろうか。

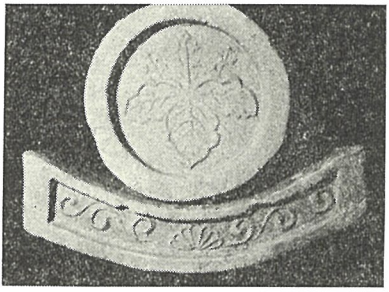
寧静ならずんば遠きを致すことを得ず（諸葛孔明）。

阪田　清（大学職員）

同志社校地出土の埋蔵文化財(9)

鈴木　重治

桐紋軒丸瓦（上）　菊唐草紋軒平瓦（下）



室町時代　　軒丸瓦の径・17cm
1976年8月　同志社中学校体育館地点（相国寺址）出土

京都市内で出土する古瓦のうち、平安宮大極殿跡や、朝堂院跡、豊楽院跡などから検出されている蓮華文や唐草文の瓦、つまり複弁八葉蓮華文軒丸瓦、単弁十六葉軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦などの平安時代の瓦は、古くから知られていて、緑釉の施された資料も含めて、それらを生産した窯跡まであきらかにされている。

しかるに、ここに一例を示した室町時代の古瓦については、中世寺院を多くもつ京都でありながら、その実体はかならずしもあきらかではない。このことは、京都についての考古学的な関心が、ついさきごろまで平安時代に集中していた状況をよく示していて、このところようやく中・近世都市を対象とする考古学的調査が進められるに及んで、とみに注目されるところとなっている。

中世の出土瓦は、当時の生産と流通の一側面をうかがわせる有力な資料であるばかりか、文様の変遷などから、権威の表徴や自己の主張と指摘される紋所などを含めて、当時の経済、社会、文化を伝える物質資料の一端を担うことになる。

当資料が出土したSK二二二一の土坑からは、大量の瓦が出土しており、焼土層などの検討によって、応仁の乱の際、山名方の攻撃で焼亡した相国寺の伽藍の一部に使われていた瓦の廃棄坑と考えられ、瓦の製作年代の下限が与えられた。つまり、中世瓦の基準資料である。

なお、永徳二年（一三八二）足利義満の発願によって造営された万年山相国承天禅寺の伽藍完工は、明徳三年（一三九二）のことであり、後醍醐天皇から尊氏に下賜されたとする桐紋が、足利家に受け継がれて、義満によって瓦に使用されたことを示している。（同志社大学　校地学術調査委員会調査主任）